

国立国語研究所学術情報リポジトリ

在日コリアン一世の大坂方言アクセントの習得： 済州道方言話者と慶尚道方言話者の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): pitchless accent, pitch accent, overgeneralization, language forming period, simplification 作成者: 高, 千恵, Ko, Chie メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002122

在日コリアン一世の大坂方言アクセントの習得 —済州道方言話者と慶尚道方言話者の場合—

高 千恵

キーワード

無アクセント, ピッチアクセント, 言語形成期, 簡略化

要 旨

渡日後に日本語を自然習得した在日コリアン一世の日本語に様々な特徴があることは、これまでにも言及されている。一般的に、言語形成期を過ぎてからの第2言語習得では、文法や語彙に比べ、音声的な面は不完全であるといわれている。大阪に居住する在日コリアン一世も大阪方言を巧みに使用しているが、音声の習得は不完全であり、ある種の外国人的な発音が残っている。それがどういうものなのかを知るために、無アクセント地域である済州道方言、ピッチアクセント地域である慶尚道方言を母語とする一世を対象にアクセント調査を行った。

その結果、慶尚道方言話者のほうが済州道方言話者よりも、大阪方言アクセントの習得率が高いことがわかった。しかし、両方言話者に共通していることも多々見られた。特に注目されるのは、(1)慶尚道方言話者の中にも済州道方言話者に近い正答率をみせているインフォーマントがいたこと、(2)習得率に差は見られたものの、両方言話者の習得しているアクセント型と習得困難なアクセント型が共通していること、(3)誤答の発話のアクセント型が高起式有核型・中高型で共通することが多かったことである。全体として、一世は大阪方言のアクセント体系を簡略化し、独自のアクセント体系を形成しているといえる。

1. はじめに

大阪は日本で在日コリアンが最も多く居住する地域である。在日コリアン一世たち（以下「一世」）は渡日後、大阪の所々に韓国文化¹と日本文化が共存するコミュニティをつくりあげた。また、そこは一世の母語である韓国語と目標言語である日本語との接触地域でもある。日本語を耳だけに頼って自然習得したために、母語の干渉などの理由から一世独自の言語運用を生み出した。

在日コリアンの言語についての研究は言語意識についてのものが多く、一世の言語運用については、金美善(1998)や金静子(2000)が、一世の母語である韓国語と第2言語である日本語とのCode-Switchingに焦点をあて、文法や語彙の視点から研究をおこなっている。しかし、一世の日本語運用そのものについての研究は少ない。

一世の日本語を不自然に感じさせる要因の1つにアクセントの問題があげられる。一世の日本語を聞いた時に感じるのは、ある種外国人的な発音だということである。本稿でのインフォーマントは大阪方言が目標言語であり、巧みに大阪方言を運用している。しかし、それとは一部異なる

るアクセントが化石化²し、一世独自のアクセント体系が形成されているようにみえる。また、その大阪方言アクセント習得には、一世の母方言によって違いがあるようにみうけられる。そこで、本稿では、一世がどのようなアクセント体系を有しているのかを明らかにすること、濟州道・慶尚道の母方言がどのように大阪方言アクセント習得に影響を与えるのかを観察することの2点を研究の目的とする。

2. 先行研究

2.1. アクセントについて

2.1.1. 大阪方言のアクセント

日本語のアクセントは一般的に高低アクセントであるといわれている。日本語のアクセントの分類で最も一般的なものとして「京阪式、東京式、一型式、二型式」という分類がある。本稿でのインフォーマントである一世たちの第2言語である大阪方言は京阪式に属する。

京阪式のアクセントは多型アクセントに属し、文節初頭の高さと、文節初頭からの音調の方向にもとづく「式」の区別を有する点で、東京式のアクセントより複雑な体系を有している。「式」のとらえ方には、「高起式・低起式」というとらえ方と「平進式・上昇式」というとらえ方（上野善道1988）があるが、ここでは「高起式・低起式」というとらえ方にもとづいて記述をおこなう。

大阪のアクセントにゆれがあるものも調査語彙の中に含まれている。それらは、3拍語と、4拍語の名詞であるが、「4. 結果と分析」では、それらを含んでいる場合とそうでない場合があるので、それぞれのところで言及しておく。

また、本稿では高起式でアクセント核のない平板型を①、1拍目に核があるものを②、2拍目に核があるものを③、3拍目に核があるものを④とする。また、低起式でアクセント核のないものを⑤、中高型の2拍目に核があるものを⑥、3拍目に核があるものを⑦とする。

なお、杉藤美代子(1980)では、2拍語第5類（低く始まって第2拍の始めが高く、続いて下降する）の語は、単独で発話されたとき、単なる低高型に発話する人が増えているとされている。そこで、本稿では、2拍語第5類の語が単なる低高型で発話された場合も正答とした。2拍名詞第5類は以下⑧とし、第4類に含めた。

2.1.2. 韓国語のアクセント

韓国語は一般的にアクセントを有さない言語とされている。しかし、韓国では慶尚道、全羅道の一部、江原道の一部、北朝鮮では咸鏡道にピッチアクセントが存在することがわかっている（福井玲2001）。

表1 韓国語のアクセント体系の分類（福井2001による）

弁別的	多型アクセント	慶尚道型（釜山、大邱など） 咸鏡道型（中国東北部も含む）
	N型アクセント	慶尚道型（慶尚道西部、全羅道光陽市） 全羅道型（一部）
非弁別的	一型アクセント	末尾高（平安道など） 第2音節高（全羅南道の一部）
		無アクセント
		ソウル、済州道など

本稿でのインフォーマントの母方言である済州道方言のアクセントは、ソウルなどと同じで無アクセントにあたる。こうした無アクセント方言では、ひとつひとつのアクセント句の境界が必ずしも明瞭ではなく、2つ以上の句が連なって平板に発音されることがある（福井玲2001）。

一方、慶尚道方言話者のアクセントは表1からもわかるように、大きく「多型アクセント」と「N型アクセント」³に分けられる。多型アクセントは、音節数の増加にともなって、ピッチパターンによる対立の型の種類が増えるもの、N型アクセントは音節数にかかわらず一定の数の対立をもつものである。

慶尚北道の西部の一帯、および全羅道の一部には、4型ないし3型の慶尚道型N型アクセントが分布する。また、慶尚道の東部（慶尚南道では釜山を中心とする多くの地域、慶尚北道では大邱を中心とする多くの地域）には、慶尚道型多型アクセントが分布する（福井玲2001）。本稿での慶尚道出身のインフォーマントの母方言は、慶尚道型多型アクセントの体系を母方言にしているとされる。しかし、慶尚道型多型アクセントと単純にひとくくりにできるものでなく、厳密には釜山方言、大邱方言などでは若干異なる部分があるとされている。しかし、大きく慶尚道方言をみて、大阪方言とのアクセント体系を比較する場合に、言及しておかなければいけないことがある。例えば、両方言には「HH」、「LH」などの共通するアクセント型が存在する。また、慶尚道方言には高い音調が3つ以上続くことはまれである。これらが、慶尚道方言話者インフォーマントの大坂方言アクセントの習得に何らかの影響を与えるということが考えられる。

2.2. アクセント習得

2.2.1. 韓国語話者の日本語のアクセントに関するもの

韓国語話者の日本語のアクセントについての研究は、日本語学習者を対象にしたものである。学習者は日本語の東京方言のアクセントを教室でインプットされており、学習者の話す日本語のアクセント研究は東京方言を基準にされているので、本稿の結果と比較することはできないが、韓国語話者の日本語アクセントの習得特徴は示せるであろう。

閔光準(1989)では、日本語では文中でも各単語のアクセントはそのまま生かされる傾向にあると指摘されている。ところが、韓国語話者の日本語の文中には高低変化がほとんどみられず、これが韓国語話者の典型的なパターンであるとしている。大西晴彦(1990)では、韓国語話者の日本語は-2型、-3型⁴、平板型のアクセントで発話されることが多く、これは「高く平らな持続」

という母語の影響であろうとされている。

韓国語のアクセントは、慶尚道や咸鏡道など的一部の地域を除いてはピッチアクセントが存在しない。慶尚道方言にピッチアクセントが存在することは広く知られており、母方言による日本語アクセントの習得の違いについて調べた研究もある。鄭樹漢(2001)では、ソウル方言話者と慶尚道方言話者では、慶尚道方言話者の方が日本語のアクセント習得の正答率が全体的に高いとしている。また、韓国語話者は平板型の正答率が最も低く、頭高型の方の正答率が高いとされている。大西晴彦(1990)の結果と一部異なっている。また、方言話者別でのアクセントの誤答のパターンは、4拍語を除いて同じ誤答のパターンになるとしている。

次に、アクセントの聞き取り実験に関しては、李明姫他(1997)が、ソウル方言話者と釜山方言話者とでは、無アクセント地域であるソウル方言話者の方が正答率が低いとしている。しかし、助川泰彦・佐藤滋(1994)のように、アクセントの聞き取り実験では、慶尚道方言話者とその他の方言話者の成績に有意差は見られなかったという報告もある。

3. 調査

3.1. 調査内容（調査語彙）

『国語学辞典』(1955)の「国語アクセント類別語彙表」(金田一春彦・和田実作成)の語彙を基本とし、さらに杉藤美代子『大阪・東京アクセント音声辞典 CD-ROM』(1995)からインフォーマントが習得している語彙を抽出し補足した。調査語彙は、大阪方言のアクセントを基準として選んだ、1～5拍の名詞、形容詞、動詞（基本・否定・過去形）の一部である。動詞の否定形は大阪方言の否定接辞である「～ヘン」を後接させた。調査語彙総数は各インフォーマント248語である。以下に、形容詞、動詞の否定形・過去形の調査語彙を示しておく。

表2 調査語彙表

品詞 拍数	形容詞			動詞（否定形）		動詞（過去形）		
	2	3	4	4	5	2	3	4
高起式	①							
	①	2 (HL)	6 (HLL)		11 (HLLL)		5 (HL)	6 (HLL)
	②			8 (HHLL)		4 (HHLLL)		
	③							
低起式	①	2 (LH)					4 (LLH)	
	②				7 (LHLL)	3 (LHLLL)	3 (LHL)	3 (LHLL)
	③			1 (LLHL)				

形容詞

2拍 ①濃い・かい(痒い) ①無い・ええ(良い)

3拍 ①軽い・丸い・遠い・強い・辛い・甘い

4拍 ②明るい・危ない・大きい・重たい・悲しい・冷たい・涼しい・小さい

③おいしい

- 動詞(否定形)** 4拍 ①売れへん・買えへん・聞けへん・泣けへん・けーへん(着ない)・寝一へん・負けへん・開けへん・めーへん(見ない)・でーへん(出ない)・けーへん(来ない)
②書けへん・切れへん・飲めへん・読めへん・建てへん・投げへん・逃げへん
- 5拍 ②踊れへん・動けへん・笑えへん・泳げへん
②歩けへん・隠せへん・入れへん
- 動詞(過去形)** 2拍 ①着た・寝た・見た・出た・来た
3拍 ①売った・買った・聞いた・泣いた・負けた・開けた
①書いた・切った・飲んだ・読んだ ②建てた・投げた・逃げた
3拍 ①踊った・動いた・笑った・泳いだ
②歩いた・隠した・入った

3.2. 調査方法

調査形式には「言わせる調査」と「読ませる調査」の両方を使用した。特に名詞には韓国語の翻訳方式や「ナゾナゾ方式」など「言わせる調査」を使用し、動詞の基本・否定・過去形、形容詞などには主に「読ませる調査」を使用した。これは、一世は日本語を自然習得しているために、動詞や形容詞などの活用の概念などがないため、調査語彙を発話するのが難しいためである。そのため、特に「読ませる調査」の場合には1回目の発話の後、調査語彙を理解しているかどうかを確認し内省してもらい、その後に2回目の発話をしてもらってそれらを録音した。インフォーマントのアクセントが大阪方言のアクセントと一致している場合は「正答」、一致していない場合は「誤答」とした、判定は著者の判断と『SUGI SPEECH ANALIZER』による測定結果を併用した。また、調査は毎回30分程度で終らせるようにした。

3.3. 調査対象

言語形成期を韓国で過ごし、戦争前後に渡日し、それ以来大阪に居住し、日本語がある程度読める一世の女性10人（済州道・慶尚道各5人）を調査対象とした。

表3 インフォーマントの属性

	済1	済2	済3	済4	済5	慶1	慶2	慶3	慶4	慶5
性別	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女
年齢	81	76	80	78	77	71	88	75	80	83
渡日年齢	31	28	17	25	14	25	25	17	28	16
居住地	東大阪	東大阪	東大阪	東大阪	八尾	東大阪	東大阪	八尾	東大阪	東大阪
職業	工員	自営業	工員	工員	工員	工員	工員	工員	工員	工員
配偶者	同*	同	同	同	同	同	同	同	同	同

同*：同方言話者

4. 結果と分析

4.1. 個人別

表4 個人別正答率

話者	正答率	話者	正答率
濟1	58.6% (139/237)	慶1	69.1% (164/237)
濟2	47.6% (113/237)	慶2	91.9% (218/237)
濟3	56.5% (134/237)	慶3	86.0% (206/237)
濟4	56.9% (135/237)	慶4	64.5% (153/237)
濟5	59.0% (140/237)	慶5	84.3% (200/237)
全体	55.7% (661/1185)	全体	79.4% (941/1185)

各インフォーマントの調査語彙全体(ゆれのある語彙は含まず)の正答率は表4のようになる。方言話者別の全体の正答率は、濟州道方言話者は55.7% (661/1185)、慶尚道方言話者は79.4% (941/1185)で、慶尚道方言話者が高くなっている。個人別に正答率をみてみると、濟州道方言話者の正答率は全員50%前後であり、濟州道方言話者が慶尚道方言話者を上回ることはない。しかし、特に慶4は、他の慶尚道方言話者と比べて正答率が低く、濟州道方言話者の正答率に近いといえる。一方、慶2・3・5は全体的に正答率が高く、大阪方言に近いものを習得していると考えられる。正答率の高い慶3・5は、他の慶尚道方言話者のなかでも渡日年齢が若く、また、慶尚道方言話者の中で正答率が最も低い慶4は渡日年齢が最も高くなっている。アクセント習得と年齢には相関関係がありそうである。また、濟2は濟州道方言話者の中で最も正答率が低いが、職業が日本人との接触が最も少ない自営業である。アクセント習得に関係するであろう社会的環境での違いを今後明らかにする必要があると思われる。

4.2. アクセント型別

表5 アクセント型別正答率

アクセント型	母方言	1	2	3	4	5	全体
①	濟	44.2% (3/52)	17.3% (9/52)	51.9% (27/52)	38.4% (20/52)	57.6% (30/52)	41.9% (108/260)
	慶	50.0% (26/52)	92.3% (48/52)	90.3% (47/52)	36.5% (19/52)	78.8% (41/52)	69.6% (181/260)
①	濟	85.1% (63/74)	95.9% (71/74)	83.7% (62/74)	82.4% (61/74)	91.8% (68/74)	88.1% (325/370)
	慶	83.7% (62/74)	98.6% (73/74)	86.4% (64/74)	75.6% (56/74)	94.6% (70/74)	87.9% (325/370)
②	濟	87.5% (14/16)	75.0% (12/16)	81.2% (13/16)	68.7% (11/16)	93.7% (15/16)	81.2% (65/80)
	慶	87.5% (14/16)	93.7% (15/16)	68.7% (11/16)	68.7% (11/16)	100% (16/16)	83.7% (72/80)
③	濟	100% (2/2)	100% (2/2)	0.0% (0/2)	50.0% (1/2)	50.0% (1/2)	60.0% (6/10)
	慶	50.0% (1/2)	50.0% (1/2)	50.0% (1/2)	50.0% (1/2)	50.0% (1/2)	50.0% (5/10)
④	濟	22.8% (13/57)	8.0% (5/57)	24.5% (14/57)	29.8% (17/57)	12.2% (7/57)	19.6% (56/285)
	慶	50.8% (29/57)	78.9% (45/57)	85.9% (49/57)	52.6% (30/57)	71.9% (40/57)	67.7% (193/285)
②	濟	64.2% (18/28)	28.5% (8/28)	46.4% (13/28)	71.4% (20/28)	57.1% (16/28)	53.5% (75/140)
	慶	89.2% (25/28)	100% (28/28)	92.8% (26/28)	100% (28/28)	85.7% (24/28)	93.5% (131/140)
③	濟	75.0% (6/8)	75.0% (6/8)	62.5% (5/8)	62.5% (5/8)	37.5% (3/8)	62.5% (25/40)
	慶	87.5% (7/8)	100% (8/8)	100% (8/8)	100% (8/8)	100% (8/8)	97.5% (39/40)

すべての調査語彙（ゆれのあるものは含まず）をアクセント型別に分類し、その正答率を個人別に示したものが表5である。1～5の数字はインフォーマントの通し番号を表している。

まず、全体の正答率を見ると、どのアクセント型でも、ほぼ全てのアクセント型で慶尚道方言話者が済州道方言話者を上回っている。済州道方言話者は全体で①・⑩・②が顕著に正答率が低くなっている。しかし、先にも述べたように正答率の低い慶1・4においては済州道方言話者と同じように①・⑩のアクセント型の正答率が低くなってしまっており、両方言話者における共通性がかいまみられる。また、両方言話者ともに高起式核有の②・③の正答率は高くなっている。

4.3. アクセント型と品詞

ここでは、4.2.でみた各アクセント型を品詞別に分け、その正答率をみていく。

4.3.1. アクセント型①

表6 アクセント型①の品詞別正答率

アクセント型	品詞	母方言	1	2	3	4	5	全体
①	名詞	濟	32.1% (9/28)	10.7% (3/28)	35.7% (10/28)	28.5% (8/28)	46.4% (13/28)	30.7% (43/140)
		慶	50.0% (14/28)	85.7% (24/28)	85.7% (24/28)	53.5% (15/28)	92.8% (26/28)	73.5% (103/140)
	動詞	濟	58.3% (14/24)	25.0% (6/24)	70.8% (17/24)	50.0% (12/24)	70.8% (17/24)	55.0% (66/120)
		[基]	50.0% (12/24)	100% (24/24)	95.8% (23/24)	16.6% (4/24)	62.5% (15/24)	65.0% (78/120)

アクセント型①の正答率を品詞別に示したものが表6である。済州道方言話者はこのアクセント型は名詞、動詞の基本形のどちらも正答率が低いことがわかる。しかし、どの済州道方言話者のインフォーマントも名詞より動詞の基本形の正答率が高くなってしまっており興味深い。

また、慶尚道方言話者については、全体では済州道方言話者よりも正答率が高くなっているが、個人差がみられる。4.1.でみた全体の正答率が他の慶尚道方言話者にくらべて低かった慶4は、動詞の基本形の正答率がきわめて低くなっていることがわかる。

4.3.2. アクセント型⑩

表7 アクセント型⑩の品詞別正答率

アクセント型	品詞	母方言	1	2	3	4	5	全体
⑩	名詞	濟	90.0% (36/40)	95.0% (38/40)	80.0% (32/40)	90.0% (36/40)	90.0% (36/40)	89.0% (178/200)
		慶	85.0% (34/40)	97.5% (39/40)	82.5% (33/40)	77.5% (31/40)	100% (40/40)	88.5% (177/200)
	形容詞	濟	75.0% (6/8)	100% (8/8)	62.5% (5/8)	87.5% (7/8)	100% (8/8)	85.0% (34/40)
		慶	100% (8/8)	100% (8/8)	75.0% (6/8)	87.5% (7/8)	100% (8/8)	92.5% (37/40)
	動詞	濟	90.9% (10/11)	100% (11/11)	100% (11/11)	90.9% (9/11)	100% (11/11)	94.5% (52/55)
		[否]	慶	100% (11/11)	100% (11/11)	100% (11/11)	72.7% (8/11)	100% (11/11)
	動詞	濟	73.3% (11/15)	93.3% (14/15)	93.3% (14/15)	60.0% (9/15)	86.6% (13/15)	81.3% (61/75)
		[過]	慶	60.0% (9/15)	100% (15/15)	86.6% (13/15)	73.3% (11/15)	73.3% (11/15)

アクセント型①の正答率を品詞別に示したものが表7である。このアクセント型は両方言話者ともに正答率が高くなっていることがわかる。動詞の「否」は否定形、「過」は過去形を示している（以下同じ）。どの項目でも正答率が高くなっている、両方言話者ともにこのアクセント型をほぼ習得していると考えられる。また、品詞別で正答率に差がみられることもない。

4.3.3. アクセント型②

表8 アクセント型②の品詞別正答率

アクセント型	品詞	母方言	1	2	3	4	5	全体
②	名詞	済	50.0% (2/4)	25.0% (1/4)	50.0% (2/4)	0.0% (0/4)	75.0% (3/4)	40.0% (8/20)
		慶	25.0% (1/4)	75.0% (3/4)	25.0% (1/4)	50.0% (2/4)	75.0% (3/4)	50.0% (10/20)
	形容詞	済	100% (8/8)	87.5% (7/8)	87.5% (7/8)	100% (8/8)	100% (8/8)	95.0% (38/40)
		慶	100% (8/8)	100% (8/8)	75.0% (6/8)	87.5% (7/8)	100% (8/8)	92.5% (37/40)
	動活	済	100% (4/4)	100% (4/4)	100% (4/4)	75.0% (3/4)	100% (4/4)	95.0% (19/20)
		慶	100% (4/4)	100% (4/4)	100% (4/4)	50.0% (2/4)	100% (4/4)	90.0% (18/20)

アクセント型②の正答率を品詞別に示したものが表8である。アクセント型②の正答率は品詞により差がみられ、両方言話者ともに名詞の正答率が低くなっている。大阪方言ではアクセント型②の名詞3拍語「HHL」、4拍語「HHLL」の語彙にはアクセントにゆれがみられるものが多く、それらを混同し他のアクセント型で習得しているためだと考えられる。また、名詞は他の品詞にくらべ、拍数が増えるほどアクセント型が複雑になっていくために習得が困難であるとも考えられる。一方、アクセント体系が単純な形容詞、動詞の否定形では、両方言話者ともに高い正答率をみせている。

4.3.4. アクセント型③

表9 アクセント型③の品詞別正答率

アクセント型	品詞	母方言	1	2	3	4	5	全体
③	名詞	済	100% (2/2)	100% (2/2)	0.0% (0/2)	50.0% (1/2)	50.0% (1/2)	60.0% (6/10)
		慶	50.0% (1/2)	50.0% (1/2)	50.0% (1/2)	50.0% (1/2)	50.0% (1/2)	50.0% (5/10)

アクセント型③の正答率を示したものが表9である。アクセント型③の調査語は名詞4拍語の「大雨」「雷」である。調査語彙が少ないのでなんともいえないが、4.3.3.でみたアクセント型②の名詞と同じような習得率になっていることがわかる。

4.3.5. アクセント型①

表10 アクセント型①の品詞別正答率

アクセント型	品詞	母方言	1	2	3	4	5	全体
①	名詞	濟	16.6% (5/30)	3.3% (1/30)	16.6% (5/30)	10.0% (3/30)	20.0% (6/30)	13.3% (20/150)
		慶	56.6% (17/30)	80.0% (24/30)	83.3% (25/30)	73.3% (22/30)	83.3% (25/30)	80.0% (113/150)
	動詞	濟	33.3% (7/21)	19.0% (4/21)	28.5% (6/21)	57.1% (12/21)	0.0% (0/21)	27.6% (29/105)
	[基]	慶	42.8% (9/21)	85.7% (18/21)	90.4% (19/21)	28.5% (6/21)	52.3% (11/21)	60.0% (63/105)
	形容詞	濟	0.0% (0/2)	0.0% (0/2)	100% (2/2)	0.0% (0/2)	0.0% (0/2)	20.0% (2/10)
		慶	100% (2/2)	0.0% (0/2)	100% (2/2)	50.0% (1/2)	50.0% (1/2)	60.0% (6/10)
動詞	濟	25.0% (1/4)	0.0% (0/4)	25.0% (1/4)	50.0% (2/4)	25.0% (1/4)	25.0% (5/20)	
	[過]	慶	25.0% (1/4)	75.0% (3/4)	75.0% (3/4)	25.0% (1/4)	75.0% (3/4)	55.0% (11/20)

アクセント型①の正答率を品詞別に示したものが表10である。濟州道方言話者にとって、このアクセント型は習得が困難であることが改めてわかる。濟3の形容詞の正答率を除いては、どの品詞でも正答率が低くなっている。また、濟5を除いては名詞より動詞基本形の正答率が高くなっている、アクセント型①と同様のことがいえる。

一方、慶尚道方言話者は、慶1・4の正答率が他の慶尚道のインフォーマントにくらべて全体的に正答率が低くなっている、濟州道方言話者との共通性がみられる。慶4はアクセント型①と同様に動詞の基本形のアクセント正答率が低くなっていることがわかる。

4.3.6. アクセント型②

表11 アクセント型②の品詞別正答率

アクセント型	品詞	母方言	1	2	3	4	5	全体
②	名詞	濟	91.4% (11/12)	58.3% (7/12)	50.0% (6/12)	83.3% (10/12)	41.6% (5/12)	65.0% (39/60)
		慶	91.4% (11/12)	100% (12/12)	91.4% (11/12)	100% (12/12)	91.4% (11/12)	95.0% (57/60)
	動詞	濟	40.0% (4/10)	0.0% (0/10)	40.0% (4/10)	40.0% (4/10)	60.0% (6/10)	36.0% (18/50)
	[否]	慶	90.0% (9/10)	100% (10/10)	90.0% (9/10)	100% (10/10)	70.0% (7/10)	90.0% (45/50)
	動詞	濟	50.0% (3/6)	16.6% (1/6)	50.0% (3/6)	100% (6/6)	83.3% (5/6)	60.0% (18/30)
	[過]	慶	83.3% (5/6)	100% (6/6)	100% (6/6)	100% (6/6)	100% (6/6)	96.6% (29/30)

アクセント型②の正答率を品詞別に示したものが表11である。慶尚道方言話者は、どの品詞においても正答率が高くなっているのに対し、濟州道方言話者は品詞によって正答率のばらつきがみられる。特に、動詞の否定形の正答率が低くなっていることがわかる。動詞の否定形は表7・8からもわかるように、高起式有核型の①と②にくらべると低起式の中高型の②は正答率が低くなっている。これは、一世にとって低起式の中高型よりも高起式のほうが習得しやすいことを示している。また、動詞の過去形でも動詞の否定形と同様に、濟州道方言話者は表7の頭高型①のアクセント型の方が低起式のアクセント型①（表10）や②よりも習得しやすいことがわかる。

4.3.7. アクセント型③

表12 アクセント型③の品詞別正答率

アクセント型	品詞	母方言	1	2	3	4	5	全体
③	名詞	濟	85.7% (6/7)	85.7% (6/7)	71.4% (5/7)	71.4% (5/7)	42.8% (3/7)	71.4% (25/35)
		慶	85.7% (6/7)	100% (7/7)	100% (7/7)	100% (7/7)	100% (7/7)	97.1% (34/35)
	形容詞	濟	0.0% (0/1)	0.0% (0/1)	0.0% (0/1)	0.0% (0/1)	0.0% (0/1)	0.0% (0/5)
		慶	100% (1/1)	100% (1/1)	100% (1/1)	100% (1/1)	100% (1/1)	100% (5/5)

アクセント型③正答率を品詞別に示したものが表12である。名詞は濟州道方言話者には個人差がみられるが、両方言話者ともに高い習得率をみせている。ここでの形容詞の調査語彙は「おいしい」(LLHL) の1語のみである。4拍形容詞のアクセント型は「HHLL」「LLHL」の2種類であるが、大阪方言でのほとんどの4拍形容詞は「HHLL」であるため、濟州道方言話者がこの「おいしい」のアクセント型を習得できていないと考えられる。

4.4. 発話パターン

次に、具体的にどのように発話しているかを各品詞ごとにアクセント型・拍数別に示していく。正答・誤答に示されている数は各方言話者全体のものである。また、正答数の横の()は正答率を表している。

4.4.1. 名詞

表13 アクセント型①の名詞の発話パターン

話者	拍数	正答	誤答		
濟	1	HH ⁵ 3(15.0)	HL 17		
	2	HH 14(31.1)	HL 31		
	3	HHH 11(24.4)	LHL 20	HHL 11	HLL 3
	4	HHHH 15(50.0)	LLHL 10	HHLL 5	
慶	1	HH 18(90.0)	HL 2		
	2	HH 33(73.3)	HL 12		
	3	HHH 31(68.8)	LHL 11	HHL 3	
	4	HHHH 20(66.6)	LLHL 8	HHLL 1	HHHL 1

アクセント型①の名詞の発話パターンを示したものが表13である。このアクセント型の名詞は表6でもみたように、特に濟州道方言話者には習得が困難なアクセント型であった。具体的には、表13からもわかるように、両方言話者ともに、1・2拍語の誤答はすべて頭高型の「HL」である。また、3・4拍語の多くは、「LHL」「LLHL」の中高型、もしくは高起式有核型での

誤答である。ただし、慶尚道方言には「HH」というアクセント型が存在するが、「HHH」「HHHH」といった高い音調が3つ以上続くことはまれであり、まとめてアクセント型①として分析することはできない。拍数別にみると、慶尚道方言話者は3・4拍語の正答率が1・2拍語に比べて低くなっている。しかし、ここでは示していないが、この点はインフォーマントによって違いがみられ、母語からの干渉だけでは説明できない部分もある。

表14 アクセント型①の名詞の発話パターン

話者	拍数	正答	誤答		
済	1	HL 20(100)			
	2	HL 96(96.0)	LH 4		
	3	HLL 28(70.0)	LHL 8	HHL 2	LLH 2
	4	HLLL 34(85.0)	LLHL 4	HHHL 2	
慶	1	HL 20(100)			
	2	HL 95(95.0)	LH 5		
	3	HLL 28(70.0)	LHL 8	HHL 4	
	4	HLLL 34(85.0)	LLHL 4	HHHL 2	

アクセント型①の名詞の発話パターンを示したものが表14である。このアクセント型は両方言話者ともに習得率が高いため、正答のほうが多くなっている。

ここで、先のアクセント型①と共に通していえることは、3・4拍語を主に中高型に誤答している点であり、注目される。インプットされるアクセント型に関係なく、一世独自の規則と考えられる。また、2拍語での誤答は少ないが、両方言話者ともに「LH」となっている。

表15 アクセント型②・③の名詞の発話パターン

話者	拍数	正答	誤答			
済	4	HHLL 8(40.0)	LHLL 3	LLHL 2	HHHL 4	HLLL 3
		HHHL 6(60.0)	LLHL 1	LHLL 1	HLLL 1	HHHH 1
慶	4	HHLL 10(50.0)	LHLL 1	LLHL 4	HHHL 5	
		HHHL 5(50.0)	LLHL 5			

アクセント型②・③の名詞の発話パターンを示したものが表15である。表8・9が示すように、このアクセント型の正答率は名詞において低く、それらのほとんどが中高型か高起式有核型での誤答である。調査語彙が少ないため、この結果から一般的なことは述べることはできないが、表13・14もあわせて、名詞4拍語の誤答のパターンは中高型であることがわかり、一世の誤答のパターンの1つの規則的なものになっていると考えられる。

表16 アクセント型①の名詞の発話パターン

話者	拍数	正答	誤答						
濟	1	LH 1(5.0)	HL 19						
	2	LH 9(12.0)	HL 66						
	3	LLH 4(13.3)	HHL 14	HLL 10	LHL 2				
	4	LLLH 6(24.0)	HHLL 9	HLLL 4	LHLL 3	HHHL 1	LLHL 1	HHHH 1	
慶	1	LH 17(85.0)	HL 3						
	2	LH 62(82.6)	HL 13						
	3	LLH 18(60.0)	HHL 7	LHL 4	HHH 1				
	4	LLLH 16(64.0)	HHLL 3	HHHL 3	HLLL 2	LLHL 1			

アクセント型①の名詞の発話パターンを示したものが表16である。ここでも両方言話者の誤答の発話パターンは類似しており、1・2拍語は頭高型での誤答がみられる。しかし、他のアクセント型の誤答パターンと違い、両方言話者ともに、3拍語の誤答は中高型よりも高起式有核型の方が多い。また、4拍語でも中高型の誤答よりも高起式有核型の誤答の方が多い。これは、一世たちがアクセント型の違いを知覚しており、ただ単に習得しているアクセント型で誤答しているのではないことを示唆している。また、ここでは名詞2拍語第5類「LF」は「LH」とまとめているが、慶尚道方言話者にはわずかではあったが、「LF」の発話がみられた。慶尚道方言の1つである大邱方言などには「LF」が存在する。これらの母語の影響により、こういった結果になったと考えられる。

表17 アクセント型②・③の名詞の発話パターン

話者	拍数	正答	誤答					
濟	3	LHL 15(60.0)	HLL 4	HHL 4	HHH 2			
	4	LHLL 24(68.5)	HLLL 6	HHLL 2	LLLH 2	LLHH 1		
		LLHL 25(71.4)	HHLL 3	HHHH 2	LLLH 2	HHHL 1	HLLL 1	LHLL 1
慶	3	LHL 25(100)						
	4	LHLL 32(91.4)	HLLL 1	HHLL 1	HHHH 1			
		LLHL 34(97.1)	HHHL 1					

アクセント型②・③の名詞の発話パターンを示したものが表17である。このアクセント型の名詞は正答率が比較的高かったため、誤答数は少なくなっているが、主に高起式有核型に誤答されている。

4.4.2. 形容詞

表18 形容詞・高起式の発話パターン

話者	拍数	正答	誤答	
済	2	HL 9(90.0)	LH 1	
	3	HLL 25(83.3)	LHL 5	
	4	HHLL 38(95.0)	LLHL 1	LHHL 1
慶	2	HL 10(100)		
	3	HLL 27(90.0)	LHL 3	
	4	HHLL 37(92.5)	LLHL 2	LHHL 1

表19 形容詞・低起式の発話パターン

話者	拍数	正答	誤答
済	2	LH 2(20.0)	HL 8
	4	LLHL 0(0.0)	HHLL 5
慶	2	LH 6(60.0)	HL 4
	4	LLHL 5(100)	

形容詞の発話パターンを高起式と低起式のアクセント型で分けて、示したものが表18・19である。

2拍語は名詞や動詞の基本形と同じように、アクセント型①「HL」は両方言話者ともに習得している。しかし、アクセント型②「LH」は主に「HL」で誤答されている。特に、済州道方言話者の形容詞2拍語はアクセント型①「HL」の1型で、アクセント体系を形成しているといえる。形容詞3拍語はアクセント型①「HLL」の1型のみで、両方言話者ともにほぼ習得していると考えられるが、ここでも誤答は「LHL」の中高型である。

最後に、形容詞4拍語は②「HHLL」と③「LLHL」の2種類であり、両方言話者ともに、「HHLL」のほうはほぼ習得していると考えられるが、「LLHL」のほうは、済州道方言話者においては全く習得されていないことがわかる。ここでは、「LLHL」の調査語彙は「おいしい」の1語のみなので、一般的な傾向ということはできないが、済州道方言話者全員の誤答が形容詞4拍語のもう1つのアクセント型である「HHLL」であることは興味深い。大阪方言の形容詞4拍語はほとんどが「HHLL」のアクセント型であるため、「LLHL」のアクセント型は習得困難であると考えられる。インフォーマントは単に、アクセント型で習得しているだけでなく、各品詞・拍数別のカテゴリーの中で、一世にとって無標であるアクセント型で、アクセント体系を簡略化し、独自のアクセント体系を形成していると考えられる。

4.4.3. 動詞の基本形

表20 アクセント型①の動詞の基本形の発話パターン

話者	拍数	正答	誤答			
			HL			
済	2	HH 18(51.4)	HL 17			
	3	HHH 21(42.0)	LHL 17	HHL 8	HLLL 3	LLH 1
	4	HHHH 27(77.1)	HHHL 4	LHLL 2	HLLL 1	HHLL 1
慶	2	HH 22(62.8)	HL 13			
	3	HHH 34(68.0)	LHL 16			
	4	HHHH 22(62.8)	LLHL 13			

アクセント型①の動詞の基本形の発話パターンを示したものが表20である。表13の名詞でみたように、誤答の発話パターンに共通性がみられる。2拍語は両方言話者とも、すべて「HL」の頭高型、3・4拍語は済州道方言話者は高起式有核型と中高型での誤答、慶尚道方言話者は中高型のみでの誤答がみられる。

表21 アクセント型①の動詞の基本形の発話パターン

話者	拍数	正答	誤答					
			HL					
済	2	LH 9(22.5)	HL 31					
	3	LLH 11(27.5)	LHL 14	HHL 13	HLL 2			
	4	LLLH 9(36.0)	HHHL 6	HHLL 5	LHLL 2	LLHL 1	HHHH 1	LHHL 1
慶	2	LH 30(75.0)	HL 10					
	3	LLH 21(52.5)	LHL 19					
	4	LLLH 12(48.0)	LLHL 9	LHHL 3	HHHL 1			

アクセント型①の動詞の基本形の発話パターンを示したものが表21である。まず、両方言話者ともに、2拍語は頭高型の誤答が多い。3拍語は先ほどの名詞と違い、両方言話者ともに主に中高型での誤答がみられる。しかし、済州道方言話者は中高型とほぼ同数で高起式有核型にも誤答がみられる。これは、個人別に違いがあるためにこのようになっている。4拍語では主に、済州道方言話者は高起式有核型に、慶尚道方言話者は中高型に誤答されており、違いがみられる。また、済州道方言話者は動詞の基本形だけに限らず、3・4拍語になると誤答のパターンが慶尚道方言話者よりも複雑になっている。これは済州道方言話者の母方言の特徴である無アクセントが関係していると考えられる。

4.4.4. 動詞の否定形

表22 動詞の否定形・高起式の発話パターン

話者	拍数	正答	誤答	
濟	4	HLLL 52(94.5)	LHLL 2	LLHL 1
	5	HHLLL 19(95.0)	LHLLL 1	
慶	4	HLLL 52(94.5)	LHLL 3	
	5	HHLLL 18(90.0)	LHLLL 2	

表23 動詞の否定形・低起式中高型の発話パターン

話者	拍数	正答	誤答	
濟	4	LHLL 12(34.2)	HLLL 23	
	5	LHLLL 6(40.0)	HHLLL 8	LLLHL 1
慶	4	LHLL 31(88.5)	HLLL 4	
	5	LHLLL 14(93.3)	HHLLL 1	

動詞の否定形のアクセント型は各拍数2種類存在する。まず、4拍語は頭高型の「HLLL」と中高型の「LHLL」であり、5拍語は高起式中高型の「HHLLL」と中高型の「LHLLL」である。それらの発話パターンをアクセント型別に分けて、示したものが表22・23である。まず、4拍語の発話パターンをみると、慶尚道方言話者がどちらのアクセント型もほぼ習得しているのに対し、済州道方言話者の場合、低起式中高型の正答が少なくなっている。4拍語の誤答は「HLLL」である。また、5拍語の場合も同じように、済州道方言話者は低起式中高型のほうの正答数が少くなり、5拍語のもう1つのアクセント型「HHLLL」で主に誤答していることがわかる。表11で、アクセント型②の正答率を品詞別にみたが、済州道方言話者においてこのアクセント型は品詞により正答率に差がみられた。そのなかでも、この動詞の否定形の習得率は低く、上でみたように、中高型を動詞の否定形のもう1つのアクセント型である高起式核有型で誤答することが原因であることが明らかになった。

4.4.5. 動詞の過去形

表24 動詞の過去形・高起式の発話パターン

話者	拍数	正答	誤答			
濟	2	HL 25(100)				
	3	HLL 24(80.0)	LHL 3	HHL 1	HHH 1	LLHL 1
	4	HLLL 12(60.0)	LLHL 5	HHLL 2	HHHH 1	
慶	2	HL 25(100)				
	3	HLL 24(80.0)	LHL 6			
	4	HLLL 10(50.0)	LHLL 9	HHLL 1		

動詞の過去形は2・3・4拍語を調査した。表にするために便宜的に高起式・低起式に分類し、それらの発話パターンを示したのが表24・25である。

まず、2拍語は大阪方言では「HL」のみであり、これは両方言話者ともに習得している。次に、3拍語については、高起式の「HLL」と低起式の「LLH」、「LHL」の3種類からなる。まず、「HLL」においては、両方言話者ともにほぼ習得していることがわかるが、慶尚道方言話者の誤答のパターンが「LHL」のみであるのに対し、済州道方言話者の誤答のパターンは複雑化している。「LLH」の場合は、両方言の誤答のパターンには類似性がみられ、主に高起式有核型か中高型での誤答がみられる。

表25 動詞の過去形・低起式の発話パターン

話者	拍数	正答	誤答			
済	3	LLH 5(25.0)	HHL 5	HLL 9	LHL 1	
		LHL 8(53.3)	HLL 7			
	4	LHLL 10(66.6)	LLHL 1	HHLL 2	HHHL 1	HLLL 1
慶	3	LLH 11(55.0)	HHL 5	HLL 2	LHL 2	
		LHL 15(100)				
	4	LHLL 14(93.3)	LLHL 1			

最後に、「LHL」の発話パターンは、慶尚道方言話者が習得しているのに対し、済州道方言話者はすべて、頭高型「HLL」に誤答している。4拍語は、高起式「HLLL」と低起式「LHLL」の2種類である。まず、「HLLL」からみると、表22の動詞の否定形で同じアクセント型の正答率が高かったのにくらべると、過去形の正答率は低いといえる。これは、「笑った」、「踊った」などのように促音が含まれる調査語彙があることや、これらの語彙は日常的に使用しないために「読みのアクセント」となったとも考えられるが、今後さらなる追究が必要である。もう一方のアクセント型「LHLL」は慶尚道方言話者がほぼ習得しているのに対し、済州道方言話者は、ここでも高起式有核型の誤答パターンがみられる。

5.まとめ

調査の結果、わかったことを以下に整理する。

1. 全体的に慶尚道方言話者のほうが済州道方言話者よりも大阪方言により近いアクセント体系を習得していることがわかった。これは、慶尚道方言話者の母方言がピッチアクセントを有しているためであると考えられる。しかし、慶尚道方言話者には個人差があり、特に慶4の習得率は済州道方言話者に近いものであった。これには慶4の渡日年齢が関係しているとも考えられる。

2. 習得困難なアクセント型は、濟州道方言話者の場合はどの品詞においてもアクセント型①・①であった。アクセント型②・③は品詞によって習得率に差がみられた。一方、慶尚道方言話者の場合、濟州道方言話者との習得率の差はみられたものの、①・①アクセント型が最も習得率の低いアクセント型であり、両方言話者における共通点がみられた。
3. 濟州道方言話者のアクセント型①・①の動詞の基本形の習得率は名詞よりも高くなっている。これは、各品詞・拍数別にアクセント体系を習得していると考えられ、動詞の基本形のアクセント体系が名詞に比べると単純であり、そのために動詞の基本形のアクセント習得率が高くなっているのではないかと考えられる。
4. 誤答のパターンには両方言話者ともに共通点がみられた。まず、名詞1・2拍語および形容詞・動詞の基本形2拍語においては、主に頭高型のアクセント型①に誤答されている。そして、名詞、動詞の基本形、形容詞の3・4拍語での主な誤答のパターンとして、習得困難なアクセント型①・①を高起式有核型か中高型で発する誤答があり、この点は両方言話者において共通性が見られた。しかし、誤答のパターンは濟州道方言話者の方が慶尚道方言話者の誤答パターンより複雑であり、母方言の干渉とも考えられる。また、角道正佳(1990)では、誤答のパターンとして、「中高化」といった傾向は母語の異なる学習者に共通したパターンであるとしているが、本稿でのインフォーマントにも同じ傾向がみられた。
5. 特に、濟州道方言話者は、形容詞4拍語や動詞の否定形などにおいて、高起式と低起式のアクセント型のうち高起式のアクセント型で、低起式のアクセント型を誤答することで、大阪方言のアクセント体系を簡略化し、独自のアクセント体系を形成している。高起式のアクセント型がインフォーマントにとってなぜ無標であるかは、今後も追究が必要であると思われる。

以上のことから、在日コリアン一世の大坂方言アクセント習得には、母方言による違いがあることが明らかになった。これは、第2言語習得におけるアクセント習得には母語のアクセント体系が関係していることを示唆している。しかし、その一方で、両方言話者には共通している点も多く見られ、母方言の干渉だけすべてを説明することは難しい。

韓国語話者の日本語アクセント習得に関する先行研究との関係を見ると、無アクセント地域のソウル方言話者よりも慶尚道方言話者の方が正答率が高いとした鄭樹漢(2001)と李明姫(1997)の結果は、本稿と共通している点がある。しかし、助川泰彦・佐藤滋(1994)の知覚実験では、母方言別に有意差はみられないとしており、今回の調査で慶尚道方言話者に濟州道方言話者に近い習得率をみせたインフォーマントもいることと関係しているとも考えられる。

6. 今後の課題

本稿では、面接調査で、単語単独の発音のみを資料としたが、一世のアクセント体系を調査するためには、本稿で調査された語彙が文中でどのように発話されているかを見ることが必要であると考えられる。またこれは調査方法とも関係しており、調査単位を大きくするほど、高齢であ

る一世にとって、面接調査の方法では正確な資料を得ることは難しく、自然会話から分析する必要があると思われる。また、一世の形成している独自のアクセント体系の原因を追究するために、一世の母語のアクセント体系がどのようにになっているのかを確認することも必要であると思われる。

注

- 1 現在、「朝鮮」と「韓国」という2つの名称が存在するが、本稿では「韓国」で統一する。
- 2 L2習得者が、充分な第2言語知識を習得して、緊張したり、不安な状況、興奮した状況におかれたり、またリラックスした状況におかれると学習をストップさせる現象 (Selinker 1972)。
- 3 これらの用語は上野善道(1984a)に基づく。
- 4 －2型、－3型とは、後ろから2番目、3番目がアクセントの核になるということである。
- 5 京阪式アクセントの1拍語は、長母音または2連母音の2拍語と類似の長さで発音される傾向があるため、このように表記される (杉藤美代子1982)。

参考文献

- 鮎澤 孝子・西沼 行博・李 明姫・荒井 雅子・小高 京子・法貴 則子 (1995) 「東京語アクセント聴取実験結果の分析—10言語グループの結果—」『文部省科学研究費（創成的基礎研究費）国際社会における日本語についての総合的研究 第2回研究報告会予稿集』
- 上野 善道 (1984a) 「N型アクセントの一般特性について」『現代方言学の課題 第2巻 記述的研究篇』, 47-55, 明治書院
- 上野 善道 (1984b) 「アクセント研究法」『講座方言学2 一方言研究法一』, 229-277, 国書刊行会
- 上野 善道 (1988) 「日本語のアクセント」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育2 音声・音韻（上）』, 178-205, 明治書院
- 大西 晴彦 (1990) 「韓国人の日本語のアクセントについて」『国際学友会日本語学校紀要』15, 52-60
- 角道 正佳 (1990) 「第30回外国人による日本語論大会予選通過者の日本語の東京アクセントからの逸脱」『音声言語VI』, 137-154, 近畿音声言語研究会
- 金 静子 (2000) 『在日韓国人一世의 韓国語・日本語混用実態研究—大阪地域を中心으로—』 崇實大学校大学院国語国文学科博士学士請求論文
- 金 美善 (1998) 「在日コリアン一世の日本語—大阪市生野区に居住する一世の事例—」『日本学報』17, 71-82, 大阪大学文学部日本学研究室
- 金 美善 (2001) 「在日コリアン1世の接触変異音の生起と定着過程について—異なる社会的属性を有する1世を事例として—」『阪大日本語研究』13, 53-71, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 鄭 樹漢 (2001) 「日本語学習者の日本語アクセント—ソウル方言話者と慶尚道方言話者の語アクセントと複合アクセント—」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』9, 29-38
- 真田 信治ほか (1992) 『社会言語学』 桜楓社
- 渋谷 勝己・金 美善 (1999) 「在日コリアン一世の日本語中間言語における動詞文」『第2言語としての日本語習得に関する総合研究（平成8年度—平成10年度科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究（A）（1）課題番号08308019）』, 180-193

- 助川 泰彦・佐藤 滋 (1994) 「韓国人学習者の日本語アクセント知覚における音節構造の影響」『東北大学留学生センター』2, 27-32
- 杉藤 美代子 (1980) 「大阪のアクセント」『国立国語研究所報告70-1 大都市の言語生活－分析編一』, 192-220, 三省堂
- 杉藤 美代子 (1982) 『日本語アクセントの研究』三省堂
- 福井 玲 (2001) 「韓国語のアクセント」『音声研究』5-1, 11-17, 日本音声学会
- 李 明姫・鮎澤 孝子・金 世連 (1997) 「韓国語母語話者の「東京語アクセント聞き取りテスト」の結果－ソウル・釜山・光州方言話者の場合－」『21世紀の日本語音声教育に向けて（新プロ「日本語」研究班3「音声言語の韻律特徴に関する実験的研究」チーム平成8年度研究報告書）』
- 閔 光準 (1989) 「韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者の評価」『日本語教育』68, 175-190, 日本語教育学会
- 閔 光準 (1990) 「日本語と朝鮮語のアクセント・イントネーション」『講座日本語と日本語教育3 日本語の音声・音韻（下）』, 303-331, 明治書院
- Selinker, L. (1972) *Interlanguage. International Review of Applied Linguistics* 10. 209-231.

付記：本論は、2003年1月に同志社女子大学に提出した修士論文「在日コリアン一世の大阪方言アクセントの習得－済州道方言話者と慶尚道方言話者の場合－」の一部をまとめなおしたものであります。本論をまとめることにあたって、諸先生方や査読者の先生から有益なご助言・ご指導をいただきましたことに感謝いたします。また、高齢にも関わらず、調査に協力していただいた一世の皆様には心から感謝の気持ちを申し上げます。

(投稿受理日：2003年3月24日)
(改稿受理日：2003年10月9日)

高 千恵（こう ちえ）
同志社女子大学大学院修士課程修了生
chunhye77@yahoo.co.jp

The acquisition of Osaka dialect accent of first-generation Koreans in Japan:

**The case of Jeju-do dialect speakers and Gyeongsang-do dialect
speakers**

KO Chie

Keywords

pitchless accent, pitch accent, overgeneralization, language forming period, simplification

Abstract

The characteristics of the language performance of first-generation Koreans in Japan who acquired Japanese naturally are being made clear recently. However, previous research focuses on code-switching between Korean and Japanese from the viewpoint of grammar and vocabulary, and there is little study on the phonological characteristics of the Japanese language spoken by first-generation Koreans. The purposes of this paper are: 1) to describe the accent system formed by first-generation Koreans who acquired the Osaka dialect as their second language and use it skillfully, and 2) to compare the accent acquisition of Gyeongsang-do dialect speakers (who have a pitch accent) to that of Jeju-do dialect speakers (who have no pitch accent).

It was found that the accent system formed by Gyeongsang-do dialect speakers is nearer to the Osaka dialect than that formed by Jeju-do dialect speakers. However, some common characteristics were found in both dialect speakers. First, some Gyeongsang-do dialect speakers showed a percentage of correct answer similar to the Jeju-do dialect speakers. Second, although there was a difference in the degree of acquisition, the accent types which have been acquired and those which have not been acquired by both dialect speakers were the same. Furthermore, the pattern of overgeneralization of the mistakes was common to both dialect speakers. It was found that the Jeju-do dialect speakers in particular simplified the accent system of the Osaka dialect and formed their own accent system.